

演題番号：D9

脳ヘルニアを呈し緊急外科的切除を実施した頭蓋内リンパ腫の猫7例

○坪居穩佳^{1) 2)}，井上克徳²⁾，寺田康平²⁾，山田寛生²⁾，井尻篤木^{1) 2)}

¹⁾ 日本動物脳神経脊椎センター，²⁾ アツキ動物医療センター

1. はじめに：リンパ腫は猫の頭蓋内腫瘍で2番目に多い腫瘍である一方で、確立された標準治療はなく、治療・予後に関する情報は不足している。当施設で頭蓋内リンパ腫の猫7例を治療する機会を得たため、外科的切除および術後の化学療法の有効性、予後について検討した。

2. 材料および方法：症例は2019年11月～2024年5月にアツキ動物医療センターまたは日本動物脳神経脊椎センターを紹介来院し、MRI検査後、外科的切除が実施され、病理組織学的検査でリンパ腫と診断された猫7例である。品種：雑種7例。性別：去勢雄4、不妊メス3。年齢の中央値：9歳0カ月齢（3歳0カ月～14歳0カ月齢）、体重の中央値：4.4 kg（2.7～4.6 kg）。術前の症状：食欲不振5例、意識障害3例、発作4例、旋回2例、運動失調2例。病変の局在：前頭葉6例、側頭葉1例。MRI検査時に7例全てでテント切痕ヘルニア、2例で大後頭孔ヘルニアを認めた。

3. 結果：7例全てで来院3日以内に開頭下で腫瘍の外科的切除を実施し、術後に神経症状の改善を認めた。病理組織学的検査は5例がびまん性大細胞性B細胞リンパ腫、2例がB細胞リンパ腫（分類不明）だった。術後に6例で化学療法を実施

し、1例は抗てんかん薬治療のみ実施した。術後の生存期間は化学療法実施した3/6例で73、103、301日であり、残りの3例は術後60～1442日現在、生存中である。化学療法を実施しなかった1例の生存期間は術後115日だった。

4. 考察および結語：7例全てで来院時に脳ヘルニアを認め、腫瘍による重度の脳浮腫、頭蓋内圧亢進が生じていた。緊急手術後に全症例で神経症状の改善がみられたことから、頭蓋内リンパ腫の猫に対して外科的切除が症状の改善に有効であると考えられた。術後に化学療法を実施した2/6例は化学療法を実施しなかった症例より生存期間が短かった。2009年Taylorらの報告では中枢神経リンパ腫の猫7例を化学療法単独で治療した中央生存期間は70日であり、猫の中枢神経リンパ腫の予後は一般に不良とされている。中枢神経リンパ腫に対する化学療法の有効性、実施時期、プロトコールについては今後さらに症例数を蓄積し、検討が必要である。